

『ポストモンゴル時代』？—14～15 世紀の東アジア史を見直す

中国・復旦大学・葛兆光

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

要旨：

14 世紀中頃から 15 世紀前半にかけて（1368-1420）、それまでユーラシア大陸の各地を支配していたモンゴルの勢力がしだいに弱体化していった。この時期は、東アジア諸国間の関係が再調整される軸となった時代である。私はこの時期を「ポストモンゴル時代」と呼んでよいのではないかと考えている。この半世紀のあいだに、東アジアは妥協、衝突、レバランスの時期を順を追って経験し、「応永の外寇」/「己亥東征」事件の後、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、新たな協調的な東アジアの秩序が築かれた。「モンゴル時代」は多くの歴史学者によって世界史/グローバルヒストリーの始まりと見なされているが、世界史の一部としてのモンゴル時代以後の東アジア史は、どのような基本的特徴があるのだろうか。これは、検討に値する重要な歴史上の問題だと思われる。

—

歴史上の幾つかの「鍵となる時期（关键时期）」については、議論を繰り返しておこなっていく必要がある。

中国の歴史には、幾つかのそのような「鍵となる時期」があった。それらの「鍵となる時期」の前と後の時代では異なる歴史的風貌がみられる。ここで、二つの例を挙げよう。一つ目は、唐から宋へと移り変わる時代である。内藤湖南の「唐宋変革」の仮説によって、755 年（安史の乱）から 1004? 年（澶淵の盟）に至るまでの時期が注目されるようになった。755 年～1004? 年および 1368 年～1420 年という二つの半世紀がいかに中古の中国と近世の中国に大きな変化をもたらしたかについて、歴史学者たちは次々と考査を試みている¹。そして、張瀚の言う中国近代思想史における「転型期」という仮説にもとづけば、1895 年から 1925 年までの時期が「鍵となる時期」として浮かび上がり、清国末期、中華民国初期における日清戦争、戊戌変法と五四運動を一貫して考察することで、知識階級、新聞出版、教育選挙、政治制度、宗教文化などの面において、伝統中国と現代中国の間に本質的な転換がみられると考えられている²。

¹ 内藤湖南『概括的唐宋時代観』、日本語テキスト、『歴史と地理』第九巻第 5 号（1922.5）pp. 1-11。英語テキスト、宮川尚志 *An Outline of the Naito Hypothesis and its Effects on Japanese Studies of China*, Far Eastern Quarter, Vol. 14, No. 4 (1955), pp. 533-552。中国語テキスト『概括的唐宋时代观』、黄約瑟訳。劉俊文編《日本学者研究中国史论著选译》（北京、中華書局、1992 年）に記載されている。

² 張瀚『中国近代思想史的転型時代』、張瀚『時代的探索』（台北：中央研究院、聯經、2004）p. 51。

歴史の「鍵となる時期」という概念は、簡単に言えば「承上启下」（本意：上文を受けて下文を書き起こす）という意味合いを帯びている。学者たちはこれらの「鍵となる時期」に、王朝/国家の内部において、本質的な変化が起きたと指摘している。しかし、王朝／国家を越えた広域史においてもまた、検討すべき重要な時期があるのではないだろうか。

これらの「鍵となる時期」に、各国と地域の地位、力と利益などが再編成されたのである。過去のバランスが壊されて、新たなバランスが築かれる。こうして、安定期が続き、広大な地域における国際関係が構築されることになっていく。

そのような時期のひとつとして、モンゴルの世界帝国が崩壊した後、1369年から1420年までに東アジアで起きた歴史的変化³について検討してみたい。私見では、この時期も東アジア史上における「鍵となる時期」である。この50年間の東アジアにおいては、モンゴルの勢力が徐々に弱体化するいっぽうで、明王朝、李王朝と足利幕府時代の日本が、複雑な外交往来、衝突及び妥協を経て、「応永の外寇」／「己亥東征」事件を機に、その後の東アジアの基本的な構造が構築された。即ち、朝鮮の「事大交隣」政策を中心として、明王朝、朝鮮と日本の間の基本的なパワーバランスが保たれたのである。それからの数世紀においても、倭寇事件、「壬申の戦い」、「明清易代」などの変化が続いたが、東アジアにおける基本的にバランスの取れた構造は数百年も続き、19世紀の中頃になって、遂に西側諸国の「堅船利砲」によって徹底的に覆された。

二

では、一番シンプルな方法で、14世紀中頃と15世紀前半（1368-1420）の間の50年にわたる東アジアの歴史を見渡してみよう。

それ以前にユーラシア大陸の各地を征服していたモンゴル帝国は、14世紀中頃以後、東アジアにおける勢力をしだいに弱めていった。1368年、朱元璋が元王朝を倒し、漢民族によって統治される明王朝が創設された。1392年、李氏は高麗王朝に取って代わり朝鮮王朝を確立した。同じ年に、日本の室町幕府の将軍足利義満は南朝の後亀山天皇を退位させ、南北朝を統一した。安南においては、1400年、陳氏から黎氏への交代があった。その5年後（1405年）、明王朝の脅威であったティムールが亡くなった。この死をきっかけにティムール帝国は皇位争奪の混乱に陥り、東アジアを狙う余裕がなくなった⁴。

私は、まさにこの時期を「モンゴル時代」の後の「鍵となる時期」と見なしてよいと思う。この「鍵となる時期」においては、東アジア諸国の間でさまざまな調整が行われた。明王朝初期の中国は支配の面でいまだ安定してお

³ 世界の近代史はモンゴルが弱体化し、元王朝が崩壊し、明王朝が確立された1368年から始まると見るべきだと指摘された。趙現海の《世界近代史的起点与明代中国的历史分流》《中国史研究动态》（北京）2016年第5期、pp. 42-43。

⁴ イギリスの学者 John Darwin は《后帖木儿时代：全球帝国的兴与衰》（陸偉芳、高英芳訳。大象出版社、2011年）において、ティムール帝国が解体した後の、世界歴史に与える影響を指摘している。

らず、大きな内部問題も抱えていた。従って、自己を中心とする朝貢体制の再建を試みると同時に妥協策を取り、「十五不征之国」を宣言した⁵。また、政策の重点を東北と西南地域におき、国境地域におけるトラブルを防ごうとした。さらに、韃靼やウリヤンハイに至る周辺諸国に対して宣撫政策（人心を落ち着かせる政策）を取った⁶。また朝鮮王朝は、一方で明王朝の承認を得るために「事大」という姿勢を取り、他方では日本との関係を緩和させて「交隣」の関係を確立しなければならなかった。日本の足利義満は、明王朝と朝鮮が手を組んで日本を脅かす危険性に留意しながら、「元寇」以来日本が孤立してきた状況を変えなければならなかった。そこで、1374年と1380年の二度にわたって使者を派遣して国交の樹立を希望したが、ともに明王朝に断られた⁷。その後日本は、明王朝の虚栄心を満足させるために、1401年に「日本国准三后源道義」の名義で国書を送り、明王朝の冊封を受けた。また、「日本国王」の名義を以て、対等な姿勢で「朝鮮国王」と交渉を行い、李氏朝鮮と国交を樹立した。1405年にティムールが亡くなった後は、その後継者とも調整を行い、明王朝と比較的友好的な関係を保つようになった。

こうして、東北アジアにおいて妥協し合う新秩序が築かれた。

三

しかし、15世紀初期に、明太祖、李氏太祖、足利義満は相次いで亡くなり、それぞれの後継者たちがバランスの取れた東アジア秩序を変えようと試みた。永楽帝は、5回にわたってモンゴルの残存勢力に対して遠征をおこなっただけでなく、ベトナム（安南）を征服して明王朝に属する交趾郡を設置した⁸。足利義持は高慢な態度を取り、明王朝を宗主国として認めず⁹、また「日本将軍」として「朝鮮国王」に接し、国際関係において朝鮮を凌駕しようとした。これに対抗して朝鮮の国王は強硬な態度を取り、1419年に日本の対馬を急襲し、日本に大きなショックを与えた。そして、明王朝でも洪武帝が取った保守的な政策を放棄し、同じ年に、望海渦の戦争で倭寇を粛清した。それゆえ、朝鮮も日本に対して強硬な態度を取る事となった。

このような「鍵となる時期」において、日本は博多妙楽寺の僧侶無涯亮倪を朝鮮に派遣した。ちょうど同じ年に、強硬な態度を取ってきた朝鮮太宗が亡くなった。かわって即位した世宗は最初から倭寇問題を徹底的に解決することに賛成しなかった。そのため、世宗が即位してから、日本と朝鮮の両国間での緊張関係がようやく緩和された。この緩和された国際情勢のもとで、

⁵ 『明史』巻322《外国三・日本》が「列不征之国十五、日本与焉。自是、朝貢不至、而且海上之警亦渐熄」と記載した。P. 8344。

⁶ 《明太祖实录》巻一二四（洪武三十五年十一月壬寅条）参照。

⁷ 田中健夫『中世対外関係史』（東京：東京大学出版社、1975年）、特に第一章である。

⁸ 永楽帝の積極性を現わす行動は、安南の征服とモンゴル遠征以外、以下の通り。①7回にわたって鄭和に南海諸国への朝貢貿易促進の航海を委ね、東南アジアとインド洋を開拓させた。②宦官をアムダリヤ川地域まで派遣。③奴儿干都司を設置。④侯顕、李達を内陸シルクロードとチベットに派遣。

⁹ 永楽9年(1411)、足利義持は三宝宦官王進の会見を断った。王進は「夷婦密引」を通じて、兵庫から帰国することができた。永楽16年(1418)3月に、また明王朝の行人呂淵の謁見を断って、京都に入ることを禁じた。汪向荣の『明史日本伝箋』（成都、巴蜀書社、1987）参照、pp. 44-46。

翌年（1420 年）朝鮮は宋希璟を「回礼使」として日本に派遣し、大蔵経を贈った。これを機に、数百年にわたる日朝外交交流史が始まり、朝鮮の「事大交隣」政策を中心とする東アジアにおける国際秩序が構築された¹⁰。その後、「壬辰の戦い」などの大きな事件が起きたものの、結局近代における「西潮東漸」で東アジアの情勢が一変するまでの長い期間、東アジアにおける中国、朝鮮、日本、モンゴル、沖縄、安南諸国の間では、「ポストモンゴル時代」という基本的な構造が継続した。

四

数多くの歴史学者はモンゴル帝国時代を世界史の発端と見なしている。例えば、本田実信、岡田英弘、杉山正明など¹¹である。しかし、注意すべきは、ユーラシア大陸を含む世界史は、1 ページ目を開いたところから、激動の時代が書き記されていることである。世界は統一されたものの、その内部は幾つか独立した空間に分離されていた。「モンゴル時代」の後、モンゴル帝国の統治と脅威から解放された東アジア諸国には、興味深い変化が起き、特別な歴史的世界が形成された。

この時期、東アジア諸国はそれぞれ本国の政治と文化の再建を手がけたのだ。

まずは中国を見てみよう。明王朝はモンゴルの元王朝に取って代わって建国された。明王朝の合法性を確立するために、朝廷においては「脱モンゴル化」が幅広くかつ厳正に行われた。張佳は『新天下之化』において次のように指摘している。明王朝初期に、漢族の文化と伝統が再建された。政府は単に「胡服、胡語、胡姓を禁じる」だけでなく、各階層の人々を対象に服装制度を制定し、胡人の風俗が入り混じった冠婚葬祭の形を規制し、礼儀風俗の規範などを徹底的に整えた。政府は一連の措置を講じて、漢族の伝統生活の規範を取り戻し、士農工商の四民社会を再建し、人々の上下関係を規定する儒教の政治秩序を再構築しようとした。言い換えれば、「文化、風俗、文献そして血統などの面から、モンゴルの影響の名残を消滅した」のである。特に、明王朝初期には、科举試験制度と儒学の提唱を通じて、政治と文化を中国の伝統に復帰させることになった¹²。

次に日本の状況を見てみよう。内藤湖南は『日本文化の独立』において、「蒙古襲来」という事件が非常に重要であると指摘した。内藤は、「丁度九州に大風が起って蒙古の船が散々になった時だったといふような事がありまし

¹⁰ 当然、日本国内情勢は一つ重要な原因であるが、「応仁の乱」（1467-1477）の後、日本は1 世紀にわたる内乱に陥って、海西に気を配る余裕がなかった。ただ、山口の大内氏が「日本国王」の名義で、白銀の採掘と海外貿易を握った。従って、東アジア海域における国と国の関係は大体平穏で冷めていた。騒動を起こしたのは倭寇が沿海地域における略奪行為だけである。豊臣秀吉が日本を統一してから、東アジア海域における国際関係が変わり始めた。

¹¹ 本田実信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、1991 年）岡田英弘『世界史の誕生：モンゴルの発展と伝統』（陳心慧訳、台北：広場出版社、2013 年）；杉山正明『フビライの挑戦：モンゴルによる世界史の大転回』（周俊宇訳、社会科学文献出版社、2013）；杉山正明『モンゴル帝国の興亡：軍事拡張の時代・世界経営の時代』（孫越訳、社会科学文献出版社、2015）

¹² 張佳『新天下之化：明初礼俗改革研究』（上海：復旦大学出版社、2014）

たが、此等の事が外部に対する文化上の獨立の考が出来るのに大変關係があつたものと思はれます。・・・今迄日本は支那を以て日本文化の師匠であると仰いで居った所が、其師匠と仰いで居った支那が、犬の子孫である所の蒙古のために亡ぼされてしまつて・・・そんなわけで今迄貴いと思つて居った支那も、犬の子孫に統一されるやうではさう大したこともないといふので、遂に支那といふものが日本人に取つてあまり有難くなくなつた」と述べている。だから、「日本は神國なり」という考えを起させるに至つた。明太宗に対して懷良親王が強硬な姿勢に出たから、日本は中国に対して、「氣焰を吐く」ことになった。内藤は、これらの時代背景のもとで、「これは詰り日本の根本の文化の獨立が出来上つたからだと言つてもよいと思う」¹³と断じた。

最後に朝鮮の状況を見てみよう。14世紀末に、李氏は北元と明王朝に寄り添つた高麗王朝に取つて代わつた。確立された朝鮮王朝は、中国との外交姿勢を調整し始めた。政治面では、明王朝を宗主国として認め、明王朝からの冊封を受けながらも、朝鮮は「且卑辞慎事之」（謙虚な姿勢で接する）という態度で接すればよいと考えていた。他方、文化の面では、明王朝より厳しい対策を取り、程朱学の政治理念と道德倫理をはじめ、儒学を普及させた。表面上、朝鮮王朝は、中国の明王朝と似た政治や文化を持つように見えた。しかし、朝鮮の國際的な地位や政治制度・社会構造上の特質により、朝鮮における儒教觀念、倫理制度及び道德要求は中国のそれよりも厳しく、長く維持されていた。従つて、どの国が「中華」の伝統をより正統的に受け継いでいるかという認識が生まれたのである¹⁴。

五

1420年、永樂帝は南京から北京へと遷都をおこなつた。当時、モンゴル勢力はすでに完全に弱体化し、東アジアの情勢に揺さぶりをかけることは出来なかつた¹⁵。同じ年に、朝鮮使者の宋希璟が日本へ赴いた。日朝間の情勢もまた安定的であつた。

「モンゴル時代」の終焉から西欧の「堅船利砲」が東アジアに入つてその地域に「ショック」を与えるまでの時期における東アジア史、或は東アジア關係史の基本的な特徴とは、どのようなものだろうか。私見では、それはすなわち以下の3点にまとめられるだろう。①環東海諸国は朝鮮の「事大交隣」

¹³ 内藤湖南『日本文化の獨立』（1922年のスピーチ）、内藤湖南の『日本歴史と日本文化』所載。（劉克申中国語訳本、北京：商務印書館、2012）p.117、p.122。

¹⁴ 朝鮮儒学学者李退溪は、儒学的倫理道德を厳しく守ることこそ、「中華」が「中華」である根柢を為すとした。だから、文明は聖賢と經典が生まれた地域で確立されるとは限らないし、朝鮮も文明の正宗をなすこともできる。朝鮮の「小中華」意識がここから生まれた。李退溪は『成王皇華集序』において、「我東国天昼壤地、邈在海表、然而箕子之所受封、孔聖之所欲居、礼义文献之称、其来尚矣」と指摘している。『朝鮮文集丛刊』第三冊、卷五十九、p.291。

¹⁵ 永樂時代に、明王朝は北方にあるモンゴルに対して、積極的に攻め込む姿勢をとつた。永樂帝は5回も北方を討伐した。モンゴル内部にも問題が起きたが、韃靼（だたん）とオイラート（瓦剌）の2部族はしばらく安定した。オイラート三王とアルクタイが封じられた。ウリヤンハイは明朝に伏し三衛という遊牧集団を設置したが、他民族によって破られた。これにより、北方の国境はしばらく安定したのである。

政策を中心として、安定的な東アジアの秩序を構築した。当該秩序は、14世紀中頃に形成され、1420年代に安定し、19世紀中頃まで、400年にもわたって継続した。②蒙古の襲来と弱体化によって諸国が刺激され、文化面において「自己中心主義」が勃興した。すなわち、諸国において、政治と文化における独立意識が芽生え、形成された。曖昧とした「認同感」から、政治承認、文化承認と経済利用などの側面が生まれた。特に、中国では、明王朝と清王朝の王朝交替が発生し、日本と朝鮮から見れば、17世紀の中頃から中国は「華夷変態」（中華から夷人文化へ変化）した。それ以来、文化の一体感の解体がますます進んだ。③東アジアの海域を舞台に、貿易圏が形成された。公式の朝貢貿易はごく一部分しか占めていない。より重要なのは、おもに商人たちが貨物の流通を押し進めたという点である。400年あまりの間、環東アジア海域という国際環境において、各国は経済面において繋がり、文化の面において競い合い、政治の面において争った。時には、はげしい衝突もあったが、それはやがてお互いに妥協しあったのである。このような構造は、西欧の「堅船利砲」が東アジアに衝撃を与えた19世紀中頃まで続いた。

2017年4月上海に於いて